

No.82 2006. 7

(株)よかネット

NETWORK

色をテーマにした科学と芸術の出会いの場を九州で再び

ロレアル賞連続ワークショップ2006 in 九州 2

「よかネタ・よかあじ」をネタに人もうけ

第14回 よかネットパーティー報告 4

皆様から寄せられた「よかネット」への御意見、近況などの紹介 5

糸島の俯瞰写真に感じる渡来文化

第3回糸島交流サロン報告 8

見・聞・食

佐賀のまちに本屋さんができた

—いろいろな要素がうまくかみ合ったまちと自治体の協働の事例— 9

多世代の有志が支える地域のイベント

鹿島ガタリンピックに参加しました 11

森の木からはじめる家づくり「久山の家」勉強会報告 12

まちあるき

「福岡の都市の面影、記憶に残っている景観をみて歩く」

第5回景観サロン（番外編） 13

近況

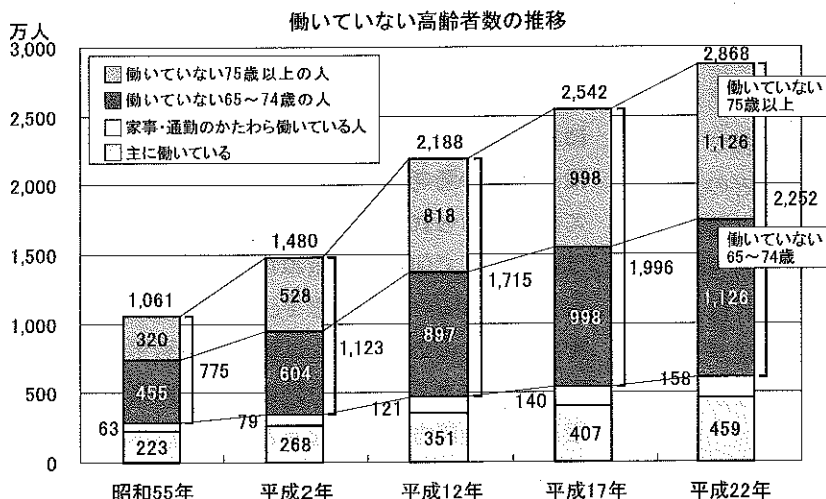
立花山に365日登る人が10人ぐらいいるらしい 14

車いすで相島へ。小学生と一緒にハイキング 15

お知らせ

..... 16

●働いていない元気で時間的にゆとりのある高齢者約1千万人、 交通・通信費が増加傾向！

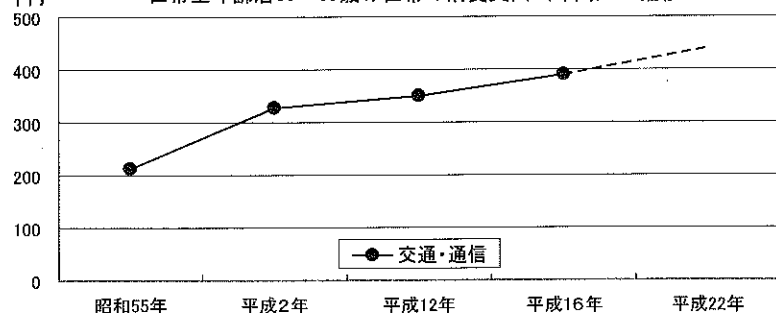


高齢者の増加とともに働いていない高齢者も増えていますが、昭和55年で775万人であったのが、平成17年には約2,000万人近くになっていると推計されます。

さらに比較的元気で時間的にゆとりのある65～74歳の高齢者は、約1,000万人になります。

一方、これらの高齢者世帯の交通・通信費は増加傾向にあり、あちこち出かけたり、連絡をとりあったりして時間を過ごしているようです。

世帯主年齢層60～69歳の世帯の消費支出（年間）の推移



資料：（上段）国勢調査

※平成17年及び22年の値は将来推計人口（人口問題研究所）の値をもとに算出した（下段）家計調査年報

※平成2年及び昭和55年の値は、60～64歳の値を用いている

色をテーマにした科学と芸術の出会いの場を九州で再び

——ロレアル賞連続ワークショップ2006 in 九州——

本田 正明、山田 龍雄、原 啓介

前回の評判が良かったこともあって、今年も九州でロレアル賞連続ワークショップを5月26日・27日にわたって開催することになり、再びそのお手伝いさせていただいた。

去年は“色”というテーマもさることながら、どういう人たちに来てもらいたいのか、来てもらえるか、というマーケットのことをまったく抜きに広報活動に走り出していたので、今年は糸乗の発案で、実行委員会形式で対応することにした。その効果は大きく、人的ネットワークや広報・宣伝先の紹介にとどまらず、口コミによる集客もかなりの数にのぼった。

去年は、私自身がよくわかっていない“科学と芸術の出会いの色のワークショップ”というものを説明して回っていたので、話を聞いた人もわかったようなわからないような反応だった。今年は去年の参加者たちが「私が楽しかったんだから、あなたもぜひくるべき」と有無をいわせない説得力をもって広告塔を努めてくれたので、非常に心強かった。

最終的に両日とも100人近くの参加を得ることができたのだが、その内訳をみると、驚いたことに去年のリピーターは2割程度で、ほとんどの人が初めての参加者だった。“色”や“科学と芸術の出会い”といったキーワードに人が集まると思い、去年の参加者にダイレクトメールを送ればかなりの反応があるだろうと期待していたのだが、そう簡単には人は動いてくれない。返事のなかった人などに参加しない理由を聞いていくと、“昆虫”や“鉄”といった発表テーマで行動を決めていることがわかってきた。人々の行動心理をつかむのは思っている以上に簡単ではない、とマーケティングの重要性を再認識させられた次第である。28日に開催したマーブルペーパー特別ワークショップも前回は上回る参加者があり、大変好評だった。
(ほんだ まさあき)

見えない世界で見えるもの？

第1日目：「昆虫は、なぜその形と色になったのか？」報告

ロレアルワークショップに参加するのは、去年に次いで2回目である。一日目のテーマは“昆虫”であった。ロレアルワークショップで何で昆虫なのかと最初は違和感もあり、どんな話が聞けるのだろうかと思いつき半信半疑で参加したのであるが、結果としては表現にもこんな世界もあるのかと感動した。色というテーマの幅の広さと異質な世界に出会えるのがロレアルの魅力であろうと思う。

●肉眼で見えないものを描くことで絵に深みがでる

昆虫を表現する手段として木村政司（日本大学芸術学部デザイン学科教授）、小檜山賢二（慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科教授）両先生の手法は、アナログとデジタルという対比でも興味深く、また、どちらも根気強い仕事をされている。

木村先生は、顕微鏡を見ながら、とにかく忠実に昆虫を描いているのである。例えば、昆虫の足に生えている毛を1mmに何本あるかを肉眼で数えて描いておられる。“描き方”をもっと正確にいうと色鉛筆で何色かを重ねた後、その色を削って毛を表現している。何と1cm四方を描くの一日を要すること。これは他の仕事も平行してやられていることもあるが、昆虫の絵に集中できる限界が1cm四方なのかなと思った。木村先生の実原画をOHCで拡大すると、ミクロン単位で一本々の毛が表現されているのがわかる。

昆虫の色も、黒、緑、赤などの色鉛筆をなん色も重ねているので、色自体もなんとも言えず深みがある。

当然、先生が描いている世界は肉眼では見えない世界であるが、実際の絵を見てみると何とも迫力のあるというか、深みが感じられる昆虫が描か



昆虫の3Dモデル。スクリーンから飛び出てきそうだった
れている。

一方、小檜山先生は、昆虫をいろいろな角度、距離からデジタルカメラで写真を撮り、これで焦点のあった部分をパズルみたいに組み合わせてひとつの昆虫を形づくっているのである。焦点のあった部分のみを組み合わせているので、部分的に縮尺が違ってくこともあるが、全体としては本物に近い昆虫の形となっている。デジタルの良さは、一度データを取り込んでしまうと、昆虫をどんな角度からでも見えるようにすることができ、また、動く昆虫も再現できる。

しかし、写真パーツの世界は拡大印刷するとぼやけたり、荒さが目立ってしまうのである。肉眼の世界では一見デジタルの方が、事実には忠実であろうというイメージはあるのだが、そうではなく、忠実に描いたアナログの世界の方が忠実であるというすぐく当たり前のことを認識させられた。

●昆虫を描く職人は、スミソニアン博物館しかない

木村先生の話で、もうひとつ興味深い話が、昆虫学者と一緒に昆虫を描いている職人がスミソニアン博物館にしかないということである。もともとはイギリスで発達した技法であったのが、イギリスの博物館ではこのような技術者を養成することが経済的にできなくなってしまい、これを受け継いでいるのがアメリカ、スミソニアン博物館とのことであった。つまり、イギリスの昆虫を描く職人がアメリカの方に移って、この技法をアメリカで継承しているのである。伝統的な文化や技術の伝承といっても、現実的には経済力のある国が引き継いでいるのであって、アメリカの懐の大きさには感心させられた。

●玉虫色は、白球を重ねて再現

法隆寺の玉虫厨子で有名な玉虫の鮮やかな色は、実は玉虫の薄い特殊な膜が重なっていることによ



スクリーンに映し出されたデジタルとアナログの昆虫を見比べながら盛り上がる出演者

る光の干渉と屈折によって発生するそうで、これは構造色と呼ばれるものだそうだ。これを日本ロレアルの研究者である足立栄希さんがピンセットと白球を使っていとも簡単に再現してくれた。実際に玉虫の羽の一番上の薄い膜を剥ぐと、真っ黒なものである。この薄い膜の中に構造色となる層が重なっていることで、美しい玉虫色が光り輝くのである。全く持って不思議な世界であった。

知らない世界をのぞき見るのは楽しいことであり、昆虫というテーマでも、色と科学に通じた話を聞くことができ、その後何人にも、この不思議な世界を話すことができ、良い気分にさせていただいた。
(やまだ たつお)

鉄の赤をキーワードとして過去・未来、宇宙・人体をみた

第2日目：「赤、それは鉄がつむぐ色」報告

2日目のテーマは、“鉄の赤”についてである。チラシにはこのワークショップのねらいが、「天、地、人に、鉄は存在しています。天：宇宙における誕生（超新星爆発）、地：柿右衛門の赤、人：血のいろのもとヘモグロビンの3つの話題を取り上げ、鉄というフィルターを通して色のもつ広がりを考えます」と書いてあった。

●天：宇宙に広がる鉄の話

野本憲一先生（東京大学大学院理学系研究科天文学専攻教授）は、爆発した星が発する光から、その光のスペクトル（波長）を分析し、星がどの元素で構成されているかを研究しているそうだ。

通常、鉄は固体・液体で存在しているが、非常に高温になった場合、気体になる。鉄を多く含んだ星が爆発したときにガス状になった鉄からは様



超新星爆発の
写真

星のかけら・塵
が球状の雲とな
って広がる。中
心部が特に赤
い。

写真：ハッブル・
ヘシリーズ・リテ
ージ

々なスペクトルをもつ光を出す。鉄のガスが赤いというのは一部で正しく、一部で間違いということになる。しかし、宇宙の創生期の星は、水素やヘリウム、リチウムという軽い元素しか存在していなかったそうだ。核融合の繰り返しにより重い元素が構成され、爆発などの拡散で、多様な元素に満ちた宇宙が実現されたそうだ。超新星の爆発の写真を見せて頂いたが、赤い雲が球状に広がっており、非常に美しい。カラーでお見せすることができないのが残念である。先生は「鉄はもっとも安定した物質なので、理論的には、最終的に宇宙は鉄のみの構成になる。」というとても壮大な話だが、鉄ばかりの宇宙は、なんだかとても味気ない世界のような気がする。

●人：人間の体の中の鉄の話

次に、永山国昭先生（自然科学研究機構岡崎統合バイオサイエンスセンター教授）から人間の体内に存在する鉄についての話を聞いた。人間の血液が赤いのは、酸素を運ぶ役割を持つヘモグロビンが鉄を含んでいるからだそうで、この鉄を銅に変えても同じように酸素を運ぶ働きをする物質になる。その場合は、緑色の血になるそうだ。昆虫



2日目のワークショップは「赤」の話で盛り上がった

の血は、実際にこの緑色をしているらしい。ひとつ言えば、人間の血も緑色だったかもしれない。なぜ、鉄になったのかはよくわからないそうだが、酸素の運搬量が鉄のほうが効率的なのではという話だった。

●地：焼物と装飾古墳の鉄の赤

最後は焼物と装飾古墳につかわれている鉄の赤の話だ。

ベンガラ（酸化鉄）は、ラスコーの壁画でも使われている最も歴史の古い顔料の一つで、とても耐久性がある。高田潤先生（岡山大学大学院自然科学研究科教授）は、有田焼や備前焼の赤に含まれるベンガラを研究している。備前焼は、釉薬を用いずに、赤などの色を表現する焼物であり、その代表的な模様が「^{ひだすき}緋襷」と言われるものである。緋襷とは、土の上に稲藁を置いて焼くと、現れる模様で、稲藁を置いた部分が筆で書いたような赤い模様となって残る。これまで、なぜ赤い色が出るか、分からなかったが、備前焼の土に含まれる鉄と、稲藁に含まれるカリウムが反応して現れる模様だということを化学的に解明したそうだ。伝統美の世界も、掘り下げると非常に面白い。

熊本県山鹿市のチブサン古墳などの装飾古墳を彩る赤も、ベンガラである。河野一隆・摩耶ご夫妻（九州国立博物館）は、九州に多い装飾古墳の研究をしている。ベンガラの赤は、ステータスシンボルであったと想像されるらしい。装飾古墳の赤は、血の赤（ヘモグロビンの赤）を意味しているのかもしれないというお話であった。

鉄は様々な製品に使われ、日常生活に不可欠な材料であるが、普段は意識しない鉄の「赤い色」にまつわる科学・芸術という切り口はとても新鮮に感じた。（はら けいすけ）

「よかネタ・よかあじ」をネタに人もうけ

ー 第14回 よかネットパーティー報告ー

雪丸 久徳

天神の中心にある「警固神社」にて第14回よかネットパーティーを開催しました。

このパーティーは、参加する人が日頃の活動の話・よかネタや、おすすめの一品・よかあじを持ち寄って、それらをつまみに「ひともうけ交流」をするパーティーです。今回は最終的には約100



燻製づくりの様子。中央は手作りの燻製機。

名の参加があり、にぎやかなパーティーとなりました。

このパーティーは一品持ち寄り型なので、人の少ないオープニングはテーブルが少しさびしい感じもありますが、参加者が増えるにつれて、各地の名物料理や旨い酒、自慢の手づくり料理などが徐々に増えていき、最後の方は並びきれないほどいっぱいになります。

「よかあじ」については、定番になっている薫製や手打ち蕎麦が登場。佐賀県の七山の諸熊さんは、朝から会場に来て山菜の天ぷらやウドの刺身をつくってくださいました。ウドの刺身は私自身初めて食べましたが、とてもおいしく印象的でした。その他にも「鯨の南蛮揚げ」など珍しいものばかりで、私も何度つまみ食いをしたことか…。今年の「よかあじ」に関しては、全体的に手作りのものが多く、また健康的な料理が多かったと思います。

また、「よかネタ」の新傾向としては、自分のところで作っているパンや胡椒といった商品を持ってきて、食べてもらって感想を聞いたりしている人が増えたことが揚げられます。自分の作ったものや思いを周りの人に向けて発信、つまりはよかネタ・よかあじ自慢はこのパーティーのウリなので、そういう意気込みで参加してくれる方が結構いたことは、よかったと思いました。

今回は料理と参加人数のバランスがよかったので、人もうけに限らず、例年以上におなか一杯のパーティーになったのではと思っています。

その後の朝会で今回のパーティーについて振り返ってしましたが、全体的に参加者が減ったことや顔ぶれが固定化しつつあるといった意見がでました。今後もっと新たなテーマ・ネットワークづ



人儲けの輪があちこちで見られました



テーブルいっぱいに並ぶ食べ物やお酒

くりに入力を入れて、より一層の「人もうけの会」ができればと思います。

(ゆきまる ひさのり)

皆様から寄せられた「よかネット」への御意見、近況などの紹介（敬称略）

■大野城市で、ある公園の一角（5号線沿いのハンズマンというお店の側）、自分の責任で、自由に遊ぶを理念にしたプレーパーク（子どもの遊び場）をつくる活動に関わり始めた。広場、大きな木などはあるが、遊具などはなく、自分で遊びを見つけ出すような場。そんな環境も福岡市近郊ではある程度「つくる」という発想が必要であることに気がついた時は愕然としたが、それが現実。福岡県内常設第1号をめざしている。大野城、春日などお近くにお住まいの方で関心がある方がいらっしゃいましたら、ご一報下さい。（福岡市 吉田 まりえ）

■甘夏のこと、甘ったるいだけでなく適度な酸味のある味が復権しつつあるらしいとのこと、安心しました。（長崎県鹿町町 邑本 太一）

■毎回これだけのものを出されるパワーに敬服しています。まちづくりは、地道な活動の積み重ねですが、プランナーも本当に根気よく、また好きでないと続きませんね。今後ともみなさん体調をくずされない程度にがんばって下さい。

(東京都文京区 鈴木 俊治)

■九州内の大小の情報を興味深く拝読しています。本県行政の参考例となるか、問題点の解決のヒントがないかという職務柄の観点で読むのですが、文章を読むと筆者の感受性や情緒に引き込まれています。分析をすれば人間らしい感覚的な面もあり、通信誌として大変読みやすいです。愛甲氏のレポートはタッチが大変面白いし、雪丸氏は歴史系の関心等々スタッフの眼でみた現代を遠くに居ながら見れるメリットが魅力です。

(熊本県熊本市 青木 勝士)

■由布院の記事、1973年から由布院ウォッチャーを始めた小生は興味深く拝読しました。「荒れた」という意見もありますが、中谷健太郎さんはじめリーダーの方々がしっかりと構築されていて素晴らしい状況であると感銘しておるところです。「佐賀城下ひなまつり」も由布院モデルをもっと研究して生かせば、より素晴らしいものとなることを期待しています。

(佐賀県小城市 村岡 安廣)

■2006年度より総合政策科学研究所に「ソーシャル・イノベーション研究コース」を立ち上げ、京都市内の町家、左京区大原の農家、そして出町商店街の一角に、それぞれ特徴ある社会実験施設を造りました。大原で作った米、野菜、薪等を商店街で販売したり、町家で地産地消の食のイベントに使ったり、都市と農村、生産と消費を人の輪でつなぐ刺激的な事業が次々と展開できています。毎日楽しんでます。

(福岡市 今里 滋)

■大学教員の論述とはちがい、身近なテーマを多彩に取り上げてあり、今回も例えば由布院など35年にわたる厚味が反映していて、興味つきぬものがあります。今後も愛読させて下さい。

(福岡県太宰府市 下瀬 美彬)

■80号「さくらガーデン」の取り組み興味深く拝読しました。TV番組「人生の楽園」のファンとしては、「将来は街を離れて、田舎暮らしを」と思っている、中々実現させるには、解

決すべきことも多い。その点、「農ある暮らしを楽しむ」というコンセプトはすばらしいと思いました。(大阪府茨木市 阿久根 昌夫)

■由布院観光の経済波及調査分析は大変興味深く拝読。最近メールはじめました。約1ヶ月で300件余りの便りがありました。やはり多いのは花だよりでした。

(宮崎県椎葉村 黒木 勝実)

■4月に平戸の茶室・閑雲亭、熊本の仰松軒、そして佐賀の唐津城と勝尾城跡を巡って来ました。戦国時代の博多商人・鳥井宗室が本能寺の変の時に持ち出したという名物を聞きに崇福寺へも足をのばしました。

(兵庫県神戸市 上谷 重男)

■2006年4月8日の新聞紙上で、大阪市の帆船「あこがれ」クルーズの参加者募集を知りました。大阪南港から紀伊半島を1回りして、伊勢湾の蒲郡港まで3泊4日・無寄港の魅力的航海です。「81才でも、いいですか？」と申し込んだら、オーケー。嬉しくなりました。当日は、黄色のセールバックをかついで参加の予定。5月20日～23日。「いってらっしゃい！」と、女房に励まされました。

(愛知県春日井市 津端 修一)

■最近は家庭菜園に力を入れています。狭い庭ですが、4月にはトマト5本、キュウリ4本を植えました。また、玉ネギも100本以上が成長しています。庭いじりは精神的に良いですよ。皆さんもぜひ始めてみてはどうでしょうか？まずはプランターからでもいいと思います。

(福岡県北九州市 丸山野 美次)

■今一度、花の天神へ再登場・・・？を願って、努力中であります。新天町の屋根と旧岩田屋を何とか「オー！！」という感じでオープンさせたいもんです。(福岡市 田中 瞳)

■街なか再生は喫緊の政策なのに進まなくて困ったもんです。やる気のない首長がほとんどで、どうすればやる気がおきるのでしょうか。人力車とペロタクシーの比較があるのでしょうか。商店街お雛様かざりは佐渡でもやっていましたが、五月人形祭はあるのかしら。パチンコ機は戦後初登場時は駄菓子屋にあり玉が入るとキャラメルが出たなあ。今年も糸乗甘夏銘作便で年に一回だけの台所仕事のマーマレード作りをし

た。美味しい。由布院は十数年前に行ったきりですが駐車場だらけの街の風景はどうなんでしょう。一心行の櫻は殺風景な駐車場掃き溜めの鶴みたいなんでしょう。どこもかしこも丸裸の駐車場だらけで殺風景でしょうがないですね。HPもよいのですが持ち歩いて読むし、保存もしたいのでお手数でも送ってください。いつもありがとうございます。

(神奈川県横浜市 伊達 美徳)

- 私は歴史が好きである。思うに、歴史的教育は政治、行政史や事件などを点で捉えて教えてきた。それでは歴史を過去から未来へと流れる流動的な視点に立っていないのではないか。その点「よかネット」は面白い。都会と田舎の生活史を動体的に捉え、近未来を予見させてくれる。自分の生き方、生活のありよう、考え方など資することが多い。地味だが中味は濃い。

(福岡市 宮崎 進)

- 今回の「街なか居住」を読んでいて、大阪市内の風景で今感じているのが、超高層マンションである。上海などでは、もっと進んでいるが、本当に問題はないのかなと思ってしまうが、現実には売れているそうである。街の風景が遠景でしか捉えとらえられない住み方はどうなのでしょう。

(大阪府大阪市 山内 芳樹)

- 商店街で小売店をしています。色々あちこちで楽しいイベントがあると参考、励みになります。ショッピングセンターと中心市街地の相関関係等、興味があります。

(佐賀県伊万里市 牧山 彰)

- 毎回楽しみながら読んでいます。有明高専も、大牟田市、荒尾市の地域再生事業にささやかながら協力しています。

(福岡市 尾崎 龍夫)

- 今年は久しぶりに就職担当。福大建築学科での就職戦線も連休明けでひと山を越します。“学科推薦”を求める企業数はバブル期を想起させますが、対する希望学生数はごくわずか。とりわけ総合建設業の不人気は際立つ。大半の学生はハウジングや建材・インテリア・コーディネート業等々への自由応募。こちらは一喜一憂が延々と続きそう。わずかばかりの新しい希望は、現場監理に数名の女子学生が挑むこと。若者の

多様な志向に御支援を。

(福岡市 河野 泰治)

- 1990年代前半に由布院のまちづくりに関わっていたので、今回の(No.81)の特集、とても面白かったです。花の木通りの整備に関わっていたんですが、今はシャッター通りとなっているとのこと。そういえば、3年前に遊びに行った時、駅周辺には全然行かなかったなあと、ちょっと反省しました。これからも楽しみにしています。何もお返しできず申し訳ない気持ちで一杯です。(東京都品川区 佐谷 和江)

- 亀川駅の橋上駅화가やっと実現しそうです。ただし、5年後ですが。来年には別府駅にもエレベーターがやっと設置されます。1973年全国に先駆けて福祉モデル都市に名乗りを上げたのに、30数年で全国最下位レベルの街になり果てました。我々関係者一同反省しなければなりません。

(大分県別府市 小田 博道)

- 作曲100曲、公演1000回、CD100,00枚、観客動員100,000人を目標に掲げ、趣味のシンガーソングライター活動を本格的に始めています。現在3年目にして作曲は50%、その他は20%程の達成率です。50才からの挑戦で達成可能か否かいささか心もとないですが、人生のささやかな目標として取り組んでゆきます。私の歌で一人でも感動させられれば幸いです。

(福岡県川崎町 櫻井 英夫)

- 昨年に引き続き、今年も田んぼをお借りしてコメづくりに挑戦しています。先日田植えに手伝いに来た友人(純粹の日本人)が、終わったあと「ああやっと本当の日本人になった感じ」とい一言。そんな気持ちにさせる奥深さがあります。(熊本県南阿蘇村 高島 一純)

- ①福岡YMCA学園のお手伝いをこの1月から。
②日英協会、シルクロード協会などのお世話を少々。
③北京に8月、12月行きます。
④いつも貴重有益な情報、謝。

(福岡市 権藤 興志夫)

- 長崎県松浦市へ転居しました。松浦市は、長崎県北にある人口2万8千人のまちですが、体験型修学旅行や土谷棚田の火祭り、人気スポット「海のふるさと館」(道の駅)やモンゴル村など、ユニークな取り組みや施設があちこちにあり

ます。ぜひ一度松浦市へ足を運んでみてください。
(長崎県松浦市 黒田 省司)

糸島の俯瞰写真に感じる渡来文化

ー第3回糸島交流サロン報告ー

本田 正明

6月17日に第3回の糸島交流サロンを開催した。今回は、志摩町に住む写真家の松尾紘一郎さんに「糸島の中の渡来文化」というタイトルで話をいただいた。

「撮りためた写真がいっぱいあるのでプロジェクターでお見せします」というメールをもらっていたのだが、風景写真を撮っている人と聞いていたので、糸島の渡来文化と風景写真がどうつながるだろうとずっと疑問だった。そんなことに気を取られていたせいか、プロジェクターの準備をすっかり忘れてしまっていた。これまでのサロンだと10人程度の参加者なので、パソコン画面をのぞき込む程度でも済むのだが、今回は気合いを入れて広報活動をして、新聞でも紹介してもらったこともあり、30人ぐらいの参加が考えられた。なんとかせねばと、大慌てで保育園から機材を借りてきてもらい、なんとか間に合わせることができた。

松尾さんは根っからの糸島人で、高校生ぐらいのときから糸島の山々から眺めた写真を撮っている。晴れた日はいつでも山に登っているのだが、昔と比べて遠くまで見通せるような澄んだ青空の日は、どんどん減っていて、年に数日しかないそうだ。そんな貴重な日に撮った写真には壱岐と対馬が見える。実際の写真を見せてもらおうと、会場からも「おー、本当に対馬が見える」と驚きの声



手前から姫島・壱岐そして対馬の島影が見える。実際の写真を見たい方は下記のサイトにアクセスを。
<http://members2.jcom.home.ne.jp/kaya.shima.jz6/>

が挙がった。

古事記の中に「此地は韓国に向かい、笠沙の御前をまき通りて、朝日の直刺す国、夕日の日照る国なり。故、此地は甚吉（いとよ）き地」という一節があるそうで、その“甚吉（いとよ）き地”というのが、伊都国ではないだろうかというのが松尾さんの仮説だ。それが事実かどうかはさておき、可也山の山頂から壱岐・対馬・韓国の方角を向いて撮った朝日や夕日の写真を眺めていると、古代のロマンに思いをはせることができる。寺や城などの礎石や土塁から古代の様子を想像するのと同じぐらいの楽しみがありそうで、これは新しい遊びを教えてもらったと、ちょっと得した気分になった。

その後の交流会では、こちらをメインに参加してくれた方も多く、農家から定年退職して学生をしている人、遊休農地を借りて農作業を通じて食の安全を考えている市民グループ、とにかく糸島が好きで福岡市内から参加してくれた女性など、実に多様だった。「どんな人が来ているか、ぜひ紹介を」という声もあったのだが、思った以上に人数が多くて、対応できなかったのが残念だった。ただ、女性4人の仲良しグループができ、「糸島ツアーをやりましょう」などと盛り上がり、農家の人が呼びかけた“エゴマのキムチづくり体験会”にも参加者が集まっていたようなので、いい交流会になったのではないだろうか。まだまだ手探り状態のサロンだが、地道に続けて親しまれるような会にできればと思う。

(ほんだ まさあき)



糸島サロンの様子。真剣に松尾さんの話を聞く参加者。

佐賀のまちに本屋さんができた

—いろいろな要素がうまくかみ合った、
まちと自治体の協働の事例—

山辺 眞一

今年の5月に改正都市計画法が成立した。まちづくり3法の見直しの一つである。大規模小売店の郊外出店が原則制限される。同時に、これまでの中心市街地活性化基本計画を抜本的に見直すことが要求されており、「選択と集中」による集中的な支援、あるいは地域全体の推進組織の設置などが要請されている。改正の背景には様々なことが指摘されているが、要は市町村を越えた都市計画の調整機能の不在、止まらない中心市街地の空洞化、そして人口減少の社会への突入があげられる。

今回は、前号の記事で指摘した「街なか全体の魅力づくりが肝腎」について、そのヒントとなるであろう事例について報告する。

●佐賀市の中心市街地活性化の目標

平成17年10月1日、1市3町1村で新制佐賀市が誕生した。北は福岡市と隣接し、南は有明海に続く南北約30kmの市域である。この中心に旧佐賀市の中心商店街は位置している。旧佐賀市の人口は平成7年の17万人から減少傾向にあり、それ以前から中心市街地の居住人口は減少が始まっていた。

以前の中心市街地活性化対策は全国でも早い段階から取りかかれていたものの、効果はなかなか出なかった。平成13年度に、都市再生整備計画を策定し、新たな中心市街地の目標「一日6000人が歩くまちをつくる」が掲げられた。

●なかなか現れない成果

昭和55年頃より歩行者通行量の定点調査が行われていたが、昭和60年代に入って最初の通行量減少があり、平成5年以降、急激な減少となり、ピーク時の1/3程度にまでなった。明らかに郊外への大型店出店と福岡・天神への流出がこの原因である。

これをなんとかして食い止めるべく、市民・事業者・行政が一体となって活性化を進めるために前述の目標が掲げられた。この目標に沿って、行政、商店街により、いろいろな活性化事業が実施

展開されていたが、なかなか目に見える効果は現れなかった。これはどこの商店街にも共通する悩みであろう。

当社は、ここの中心市街地活性化のお手伝いをさせて頂いたこともあるが、担当課の職員は、日々活性化のために机上だけではなく、いろいろな折衝、対外活動を手がけられており、その姿勢には本当に頭が下がる思いである。今回の事例はそういう職員の活動の成果として現れたものの一つとして紹介したい。

●地域との協働のきっかけ

ある日、中心部から離れた住宅街でNPO組織によって運営されていた子どもの本専門店が、店舗の建て替えによって移転を余儀なくされ、この担当課へ相談に訪れたところから、この協働作業は始まる。

ここで、少しこの本屋さんを紹介したい。運営しているNPO組織は、20年以上前から営業されていた子どもの本専門店が廃業されるのをきっかけに、当時、この本屋を利用していた主婦の方々に、2003年に設立されたものである。NPO活動としては、店舗で子ども向けの良質な本を紹介し、販売するというだけでなく、外に出向いて本を読み聞かせも行っている。したがって、本屋さんは毎日営業されているわけではない。

相談を受けた担当課では、中心街の空き店舗対策の一環として、知り合いのいくつかの店舗、家主との交渉をはじめ、破格の家賃で快く了承された店舗の確保に成功する。しかし、長い間空き店舗となっていたため、傷みも激しく、使えるようにするためにはいろいろな修理が必要となった。

●多様な人材の居る自治体

この店舗修理をするには、NPOだけでは負担



商店街の入口にある店舗の修理前

できない資金が必要なため、担当職員やその仲間がボランティアで協力することとなった。今回は、大工仕事に長けている人材、技術を持った人がたまたま近くにいたと思われるが、多くの人材を抱える自治体に、一芸に秀でた人材の情報があれば、いろんな場面で役に立てるのではないかと思う。

●できることを提供する雰囲気が必要

実際に店舗修理が始まり、これまで空き店舗だったところに、新しい店ができるという情報が地元伝わり、行き来する人たちも何ができるのかと、物珍しそうにのぞき込む人や、地元の商店街の人たちからも、店舗への期待の言葉や協力の申し出が徐々に増えてきた。

もともと、商店街活動は、コミュニティ活動の一つであり、事業者たちが一心同体として活動する場であり、濃厚なコミュニティの続いていた地域のはずである。しかし、歯抜けの商店街となり、残っている店舗が僅かとなった時に、そのコミュニティ自体が維持できなくなり、次第に店舗間も疎遠となり、ますます寂しい通りとなっていく。

そういう環境の中に、活性化を言葉で訴え続けていた行政職員が、自ら参加して店舗づくりに協力している姿を地元の店主・市民が見たとき、地元の共感を喚起したのではないだろうか。

おそらく、新店舗に対する期待や好奇心だけでなく、行政に対する信頼度が一段階高まったのではないかと思う。

●中心市街地の協働のプロセス

店舗修理には、人手だけでなく、材料が必要である。ここにも地域の協力が見られる。例えば、木材は、合併によって市内事業者となった森林組合の協力によって、子どもたちのためという理由で、内装、本棚、テーブルなどの材料は県産杉材

を安価に入手することができた。また、ファサードの塗装は、商店街の人が自前で協力してくれたり、地元の高校生が手作業に参加したりなど、いろいろな人たちの賛同と作業への参加によって、店舗は完成した。

一つの店舗移転をきっかけとして、新たなコミュニティが生まれ、そこから次のプロジェクトのアイデア、そして実践へ、というような協働のプロセスは、個人ができることを持ち寄り、実際に参加し、完成を共に喜ぶという、地域コミュニティの基本的な姿という気がする。このようなことがあちこちで取り組まれることではじめて、失われたコミュニティの再生や、活性化という大きな目標の達成に繋がっていくのではないだろうか。人々の知恵と力が集まり、一つのコトが成し遂げられると、「次はこういうコトをしよう」とか、「今度はこんな店を」など、新たな活動の目標を求める動きがでてくることも期待できる。

●前例の無い協働への理解

これらの作業は、当初、職員のボランティアという形で手伝われていたが、昼間の作業時間が必要となり、担当課の上司の判断によって、行政サービスの一環として手伝うことが認められた。ボランティア作業中の事故などのリスクへの対応だけでなく、行政サービスとして、市民、行政、地域の理解が得られるという判断である。これから、地域、市民と行政が協働でコトを進めていくためには、このような前例の無いコトも積極的に認めていく組織の理解と認識が不可欠になっていると思う。 (やまべ しんいち)



店舗内装もみんなで作業



完成した店舗の様子

多世代の有志が支える地域のイベント 鹿島ガタリンピックに参加しました

愛甲 美帆

5月28日、佐賀県鹿島市で開催されたガタリンピックに参加した。日本一の干満差6mの有明海の干潟上で、障害物競争や旗取りのような競技などをするイベントで、昭和60年から始まり今年で22回目である。

今年の競技は全部で9種目。競技参加者は1,400人、来場者数は25,000人であった。参加者は、地元の小学校から大阪府の中学校の修学旅行生、交流のある韓国など国外19カ国と幅広い。国外の数は、事務局が地元中学校の英語教師や大学の留学生などグループに呼びかけて参加した数で、他に一般で参加している人もいるということだ。

よくテレビで見るとは、干潟の上に敷いた細い板の上をブレーキの無い自転車で走って早さを競ったり、クレーンからつり下げられるロープにつかまってどこまで遠くに飛べるかを競う競技だ。

誘ってくれた友人は、毎年このイベントを楽しみにしている。ただ人気のあるイベントなので、申込み状況によっては、参加できないこともあるそうだ。今回は1種目のみ2人のエントリーができ、残り6人は当日のキャンセル待ちをした。

●こんなに水があって、競技ができるのだろうか…。

会場に着き驚いたのは、競技開始一時間半前なのに想像していた干潟ではなく、水がなみなみとある海そのものの光景だったことだ。22年も続いている地元のイベントなので、間違いはないはずだが、そんなに短時間で潮が引くものなのかと疑ってしまった。しかし、もちろん競技開始時には



有明海に面する鹿島市

すっかり干潟が現れて競技ができる万全の体制となった。

キャンセル待ちでも、メンバー8人全員が競技に出られた。待ち時間、自分の仲間が出ていなくても、競技を見ているだけで楽しい。仲間同士で手づくりのユニフォームを着ている人、それではとても動けないだろうと思える衣装やかつらをかぶった人達が大勢いる。何よりも勢いよく干潟に突っ込み、誰かわからないほど泥まみれになる姿に会場は沸き、見ていて爽快な気持ちになる。

私は「仁義なき戦い！潟上の女たち！！」という競技に参加した。発砲スチロールの台の上に6人程上がり女性同士でおしくらまんじゅうをするものだ。寸前まで「怖いですね〜」と話していた人が敵になる。私は途中で足から落ちてしまった。干潟は、大会キャッチフレーズ「みんなでニコニコ。干潟って気持ちE」というように、ヒンヤリ、なめらかな土で本当に気持ち良かった。

先に顔から落ちた人はお腹あたりまで埋まっておき「しょっぱ〜い」と叫んでいた。そうか、ここは水田、泥沼ではなく、海なのだ改めて思った。競技をしているすぐそばでムツゴロウなのか、ピョコピョコ動いている生き物を目にするなど本当に干潟を体感できた1日だった。

●地元の中学生もスタッフで参加

ガタリンピックの参加料は500円である。こんなに、競技を楽しめたのも、大会運営のスムーズさ、また影の働きをするスタッフがいることにあるのではないと思った。

駐車場と会場を結ぶ無料バスの送迎に始まり、キャンセル待ちの手続き、1種目100人は超える人数を入場する前に整列させるなど本当にスムーズである。

また、参加者に一人ずつ配布されるゼッケン、安全ピン8本、おみやげの海苔とバンダナのセットづくりや競技中に使用する地下足袋を次に回すためにひたすら地下足袋の山を洗う人もいる。

さらにすごいのは、スタッフとして中学生が参加していることである。この取り組みは「地元を誇れる子どもになって欲しい」「将来、ガタリンピックを引き継いで欲しい」という思いから6年前より始まったそうだ。開会式で演奏するブラスバンド部、学校行事としての1年生の参加、その他個人で参加する学生もいる。体操服を着た中学

生が受付をしたり、「ごみはありませんか」と会場内をまわってごみ拾いをしたり、募金を呼びかけたり、時には恥ずかしそうにしながらもそれぞれ役割を果たしていた。

会場となる道の駅鹿島では、ガタリンピック以外の日でも干潟体験ができる。直売所で売られている玉ねぎはおいしく、冬場は炭火で牡蠣も食べられる。ぜひ一度干潟体験お勧めします。

(あいこう みほ)

森の木からはじめる家づくり

—「久山の家」勉強会報告—

雪丸 久徳

森の木からはじめる家づくり「久山の家」勉強会（主催：久山町田園都市課、協力：協同組合地域づくり九州）が6月16日（金）に行われた。この勉強会は久山の森の木を使った住まいづくりを森林所有者・製材所・建築士・行政・消費者が一緒になって考える勉強会で、会場のアクロス福岡円形ホールには100名近く集まっていた。

まず前半は、～原木選びからはじめる家づくり「久山の家」編～と題して、地域づくり九州のメンバーで建築家の三浦逸朗さんから「久山の家」プロジェクトの報告があった。

久山町は、天神・博多から車で約30分ほどのところにある町だが、町の面積37km²の3分の2が森林とのことだ。しかし今、木材の単価が安いため、その維持管理が難しい状況とのことだ。

「久山の家づくり」プロジェクトのネライは、林業の活性化、森の維持保全、質の高い木造住宅の提供、適切な土地利用とのことで、実行委員会をつくって取り組んでいる。このプロジェクトの



一本づつこの柱に使うか把握して番号をつけておく

特徴的な試みとしては、原木から現場搬入の段階までの生産履歴を開示する木材トレーサビリティに取り組んでいる点だ。これにより、消費者は家の柱や梁にどこの山のどういう位置で育った木が使われているかがわかる。

昔の家づくりはどの木でどの柱をとるか一本づつ頭の中で設計して、山を歩きまわり切り出すところから始まっていたそう。しかも各家主がそれをやっていたというから驚きだ。それでいて3世代100年にわたってもつ家をつくるわけで、昔の人の知恵や技術は凄かったのだと改めて感じた。

三浦さんは今回のプロジェクトを通じて「木材単価が安く、山の維持管理が出来ない状況の中で、山にある程度のお金を落としつつ、また関係する人が損をするのではなく、事業として成り立つしくみをつくりたい」と言っていた。統一規格・量産体制の中で、原木からはじめる家づくりが業として成り立つか、今後の展開を期待したい。プロジェクトについては今後も機会があれば報告したい。

後半は、実際に久山の原木をつかって家を建設中の糸乗より、「田園地域で広い土地に100年持つ住宅を建てて住むこと」というテーマで話があった。糸乗の報告では、「田園楽住」構想についての説明があり、その構想の概要を私なりに簡単にまとめた。

- ①人口減少や高齢化で放置され荒れた遊休農地となっている土地を活用して、過疎化に悩む農村集落への定住をすすめる。農村集落に若い世代が入ってくことで、集落が元気づく。また定住人口が増えると役場は税収が増える。
- ②遊休農地の貸し手（地主）は土地を売ることなく、農地を維持管理することができる。地主は土地を貸すことで、月々の賃料が入る。
- ③住み手（田舎暮らし希望者）は、都会のマンション賃貸料金並か、それ以下の金額で家を建てることができ、しかも広い敷地で菜園や果樹園をつくりながらのびのびと豊かな暮らしができる。これらの暮らしは定年後の夢ではなく、サラリーマンをしながらでもできる。また、若い子育てファミリーは、集落のコミュニティの中で安心して子育てができる。
- ④住み手と受け入れ手がうまくうちとけるように勉強会をしたり決まり事をつくったりすること

で、田舎暮らしが不安な人でも安心して移り住める。

なお、田園楽住に関する詳細な内容はよかネットNo.68やNo.73に糸乗が記事を書いているので参考にして頂きたい。今回の勉強会に参加して私自身は、「住む人も受け入れる側の農村集落も、役場も、みんな得して楽しく暮らす」という言葉が一番印象的で心に残った。

この勉強会を通じて、地域づくりの一環としての住まい方、家づくりの話を知ることができた。一概には言えないけれど、今の住宅づくりのほとんどは住宅単体で考えがちで地域づくりとか関係されていると思う。森の木から始める家づくりも、事業としての生産性や誰がマネジメントするかといった問題や都市計画法上の土地利用規制の問題などクリアすべき課題は多いようだ。

家を生産する側はもちろん、住む側もそろそろ統一規格・大量生産の路線からはずれて、地域と向き合った住まい方を本気で考える時かもしれない。
(ゆきまる ひさのり)

「福岡の都市の面影、記憶に残っている景観をみて歩く」

－第5回景観サロン(番外編)－

本田 正明

第5回景観サロンでは、実際にまちの景観を見ようと“まち歩き会”を行った。対象は町屋などが残り、昔ながらの雰囲気が残る住吉・美野島・春吉(博多部)のエリアで、昔の町の様子をよく知る人に案内してもらいながら、想像によって福岡の景観を楽しもうという内容だ。当日はあいにくの雨模様にもかかわらず、景観研究をしている学生から色の専門家、ランドスケープデザイナーから役所でまちづくり担当している人など10人を超える人たちが集まった。

●博多駅のあたりは一面“人参畑”でした

ナビゲーターをお願いした田中さんは、「大正元年生まれの親が、駆け落ちしてきて美野島に所帯をもったの。私自身4歳ぐらいから美野島の記憶があるわね」という地元人。昔は天神で飲食店などを経営していたそうだ。このまち歩きのために、手作りの地図と解説まで作ってくれていた。さっそく集合場所の住吉神社で「このあたりは一

面人参畑だったんです。人参公園というのはその名残。福岡空港ぐらいいまでは見渡せたんじゃないかな」と教えてくれる。ビルの建ち並んだ景観しか知らない自分は、それだけでショッキングな話だ。いかに福岡という都市が新しいものか、気づかされる。このエリアは那珂川と旧国鉄線に挟まれた弓なりの地域で、醤油やガラス、ゴムなどの工場が多く立ち並び、ほとんどの建物が杉板張りの木造の建物で2～3階建てだった。住吉小学校と稲荷橋を渡ったあたりは色街に関係する職業の人が住んでいたりと、南の木下町・新簀島町(旧町名)周辺には、お金持ちが住んでいたようだ。

●路地が町の雰囲気を醸し出す

コースは、那珂川沿いに北(住吉)から南(美野島)へ進んだのだが、住吉では小学校からの友達の江本さんが住んでいたという町家を紹介してくれた。「今は結婚して太宰府にいて、確かお兄さんが住んでるはず」、「昔は江本さん家のような木造で軒先に樹木のある家がびっしり横並びで建っててね、杉板張りで黒っぽくて綺麗だったなあ」「このあたりは、空気もしっとりとしてて情緒があったの」と、私たちが当時の町の情景を想像できるようにいろんな話をしてくれた。

住吉や美野島近辺に町屋が残っているのは、戦争の時に焼夷弾が1～2発落ちてボヤ騒ぎがあった程度で、ほとんど戦災がなかったからだそうだが、それでも思っていた以上に新しい住宅やマンションが多い。昔の路地がそのまま残っているおかげで、なんとか町の雰囲気がとぎれずにつながっている感じだ。参加者の一人が「路地がまちの景観をつくっている」といっていたが、本当にそうだったと思った。ただ、路地を歩く私たちのそばを



建物は新しいが雰囲気が残っている路地



住吉にある町屋 (江本さん宅)



街なかにある洋館付き住宅

通る車は、道が狭くとても窮屈そうだったので、住むのは大変かもしれない。そんな不便を含めて町屋を若者数人でシェアして街なか居住を享受してみても、という話も出ていた。

住吉から美野島に入ると、だんだん宅地が広くなって立派な建物が増えてくる。敷地内に洋館が建っている家まであった。「日本家屋の横に洋館がある家はお金持ち、と子供のころから聞いてて、昔は何軒かあったんだけど、現在はこの1軒ぐらいしか記憶にない」とのこと。

●高層マンション街となった“よってらっしゃい通り”

橋を渡って対岸の清川に入ると、打って変わって高層マンションの住宅街のイメージになる。

「このあたりはずっと色街と旅館街だった」と説明してくれるものの、料亭の三光園が残っている以外はほとんど面影がない。わずかに残る細い路地は、遊郭のおネエさんが「よってらっしゃい」と呼びかける言葉をもじって「よってらっしゃい通り」と呼ばれていたそう。その路地にある更地の一区画で、「火災でなくなったんだけど、ここに3階建ての一楽ってお店があったんです。石畳がつづいて、屋根が反った塔のような風格のある建

物で、鏡の間があることで有名でした」と教えてくれた。よく細かく覚えていますねと感心していると、この路地は夜中でも人通りがあり明るかったので、通学路として使っていたのだそう。

普段であれば、素通りしてしまうような路地もちょっと歴史などを聞くだけで、ずいぶん魅力的に感じる。ただ、田中さんのような街の風景の記憶を持った人は、福岡市人口の約4%、5万人程度とかなり少ない（よかネットN0.76の表紙より）。こうした街の風景・景観という知的情報の受け継ぎもまちづくりの大事な要素の1つだ。まち歩きイベントだけでなく、“記憶”を“記録”にする活動、たとえば本づくりなどもやっていければと思う。（ほんだ まさあき）

所 員 近 況

■立花山に365日登る人が10人ぐらいいるらしい

5月連休の中日に急に思い立ち、また、自分の体力の確認も兼ねて、自宅から車で20分で登山口に行ける立花山に登ってみた。

立花山は標高367m、登山口からだと300m程度の高さの山であり、健脚の人だと1時間で登り降りできる山である。朝10:00過ぎに登りはじめると、既に降り初めている人もおり、早朝から散歩感覚で登っている人もいよう。私が登り降りする間に、だいたい20組程度、単独の人は2～3人に会った。その内訳は熟年夫婦組が5～6組、家族連れが5～6組、女性や男女混合グループなどのその他の組が4～5組といった感じであった。登山を楽しむ人が増えているというのが、熟年夫婦が意外と多かったのには驚いた。健康ブームもあり、金もかからない気楽な軽登山を楽しんでいる熟年世代が多いことを実感させられた。

私も40分くらいで頂上にたどり着き、10分ほど休憩してすぐに下山したのであるが、登山口近くの道路脇には、所々で夏ミカン売っている農家があり、ちょうど農家の人がいたので夏ミカンを買って、立ち話をしていると「毎日、この立花山に登っている人が10人ぐらいいるみたいだ。雨の日には傘をさして登ってるので、ほんとに感心します。登らないと体調に悪いのじゃないかな」と言われていた。そうした「毎日登山者」は、時間的に余裕ある高齢者だと想像されるが、本当によい時

代になったものだと思う。

私は体力のなさを実感した山登りでもあった。

ちなみに日本地名大辞典によると立花山には1300年代に大友氏の筑前支配の拠点のひとつであった立花城が築造されており、博多の貿易などの利権争いで幾度もこの一帯で争いをしている。しかし、慶長5年（1596年）の関ヶ原の合戦後、黒田長政は入国すると、翌6年に破却されたと記されている。（山田 龍雄）

■車いすで相島へ。小学生と一緒にハイキング

6月初旬福岡県新宮町にある「障害者の自立を考える根っこの会」のメンバー19名で再び相島へ遊びに行った。「根っこの会」は2003年からの活動で、以前新宮町内のバリアフリーマップを作ったメンバーが中心となって、ひと月1回集まり、障害者の制度の勉強やレクリエーション、時には行政と話し合いをするような活動をしている。

相島は船で10～15分の距離にあり、釣り客などに人気の島だ。住んでいる人間よりも猫の数が多いので別名猫島とも言われるそうだ。

2年前にも、メンバーのほとんどが相島に行ったことがないということで、木製のスロープを手作りして持参し、車いすのまま乗船した。今回は、その渡船に波の浮き沈みにも対応するスロープが整備されたので、再び遊びに行くことにしたのだ。当日は、心配した雨は無く、良い天気だったのだが、波が少し荒くスリルある船旅であった。

相島では、高台の方まで舗装された道があり、所々海を見渡しながらかつて1周することができる。今回は、相島小学校の子ども6人（1年生から6年生の女の子4人、男の子2人）と先生が案内してくれた。相島小学校は生徒数13人、中学生は3人ということだ。高校生からは、島を出て学校の近くなどに下宿する。子ども達は、いつも一緒に遊ぶということで、年齢に関係なくとても仲が良く、とにかく素直でかわいかった。

ハイキング中は、予備の車椅子があったので、子ども達は交代して乗ったり押したりと体験をすることができた。途中少し急な道路があり、なかなか姿を見せない。押し合いっこをして疲れたかなと思っていると「見て～」と後ろからの声。振り返ると車いすに乗った女の子が電動車いすの背中に付いている取手を握って、ちゃっかり引っ張ってもらい、歩いている私達を追い越して先に行



乗船の様子。スロープはデッキの床の穴に設置する



電動車椅子につかまって歩いている人を追い抜いていく子ども達

ってしまった。

途中、小学校1年生の女の子が、道ばたになっている野いちごを発見した。私は野いちごがなっている様子をあまり見た経験がない。とにかく赤いのを探そうとしていると先生が「赤いのはすっぱくて黄色が甘いですよ」と言われた。早速品定めをして野いちごの味を満喫していた。ふと前を見ると、その野いちごを発見した女の子が車いすのメンバーの様子をうかがいながら「はい、野いちごです」と自分が摘んだ野いちごを手渡している。皆「ありがとう。おいしいね」と口にほおぼり喜んでいて。その光景を見て、スロープが付きバリアフリーになって良かったとそれで満足してしまい、しゃがまないと野いちごは摘めず、車椅子の人は食べられないことに気づかなかった自分を反省した。

子ども達の無邪気な様子やさっと気づいて動くその素直さに、久々に心洗われる時間を過ごした休日だった。

（愛甲 美帆）

お 知 ら せ

●全国都市再生まちづくり会議2006の案内

全国各地で先導的に活動しているまちづくり衆が、さらにパワーアップして東京に集結します。みなさんも是非、年に一度のこの機会に、長年にわたってまちづくりに取り組んでいる専門家との交流を深めてみませんか。

開催日:2006年8月5日(土)～8月6日(日)

会 場:中央区立常盤小学校(東京都中央区)

事務局:(NPO)日本都市計画家協会

TEL:03-5401-3359

※なお、案内チラシが欲しい方は、一声かけてください。



●協同組合「地域づくり九州」のホームページができました

協同組合「地域づくり九州」は、地域に密着して仕事を続ける仲間が、それぞれの専門家のネットワークを活かすために平成13年3月に経済産業省九州経済局・国土交通省九州地方整備局の認可のもとに設立した非営利の団体です。

これからの2010～2015年の間に起こるであろう地域の変化やニーズに応えるために地域の実情に通じた専門家集団である組合メンバーが知識、経験、技術を相互に活かし合い、地域づくりのお手伝いをしたいと考えています。

現在、当社も含めて10社が加盟し、運営しております。このたびホームページを作成しましたので興味のある方は是非、覗いて下さい。

ホームページアドレス:<http://kyushu.main.jp/>

編集後記

■今回の「よかネットパーティ」では、懲りずに「薫製(熱薫)」を出ささせていただきました。毎年、ワインの香りが強すぎたり、塩辛かったり、味がなかなか一定しなかったのですが、ここ2年は味も一定してきたのかなあと自画自賛しています。来年もまた創ることになるでしょう。

■毎日、サッカーのワールドカップを見ています。その経済効果としては1兆円とか3兆円とかが予測されており、まさにスポーツ産業の極みといえます。私は、正直いってJリーグにはあまり興味はないのですが、やはり国同士の戦いは何故かしら力が入ります。また、ワールドカップは、各国のスーパースターの凄いプレーが見られ、サッカーの面白さを再認識させてくれます。よかネット82号が届く頃には、準決勝あたりの戦いがあるのではないかと思います。(だ)

■皆様から寄せられたよかネットへのご意見、近況は全部で約190通ありました。それらの中には

「湯布院の記事を興味深く読ましていただいた」
とか「〇〇さんの記事が面白かった」など、所員の励みになるようなことも多く書かれてあり、うれしく思いました。また、皆様の日頃の活動の報告につきましても、所員一同興味深く読ませて頂いております。ありがとうございました。(ゆ)

よかネット No. 82 2006. 7

(編集・発行)

(株)よかネット

〒810-0802 福岡市博多区中洲中島町3番8号
福岡パールビル8階

TEL 092-283-2121 FAX 092-283-2128

<http://www.yokanet.com>

[mail:info@yokanet.com](mailto:info@yokanet.com)

(ネットワーク会社)

(株)地域計画建築研究所

本社 京都事務所

TEL 075-221-5132

大阪事務所

TEL 06-6942-5732

東京事務所

TEL 042-501-2531

名古屋事務所

TEL 052-202-1411

(株)地域計画・名古屋